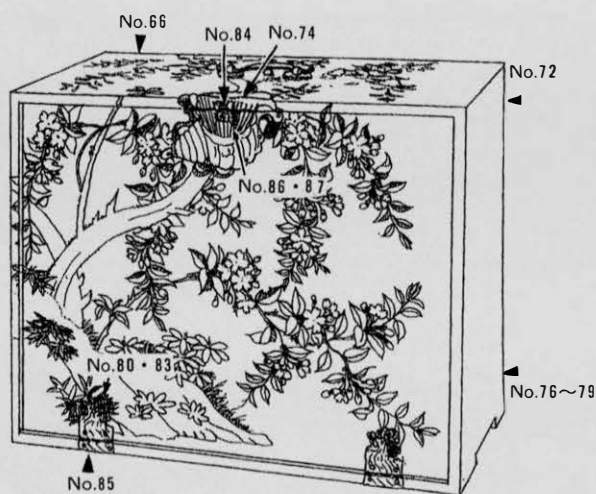


桜蒔絵器局

平成10年度修復事業



The numbers indicate
the photos' numbers.

品名：桜蒔絵器局（江戸時代17-18c）

所蔵：ケルン東洋美術館 ドイツ

品質構造：木製黒漆塗り、蒔絵、梨地

所蔵番号：E-18

請負者 奥窪 聖美

修理担当者 奥窪 聖美

原稿執筆 加藤 寛

桜蒔絵器局



5 桜蒔絵器局 (修理後)
Sakura Makie Kikyoku (after restoration)



6 同 (修理前)
Sakura Makie Kikyoku (before restoration)

はじめに

桃山時代以降、我が国から輸出された夥しい数量の漆芸品は、欧米人に漆塗料独特の艶や繊細な加飾技術で驚きを与え、作品自体のもつ西歐人を共感させる共通の美意識で魅了し長い年月大切にされてきた。しかし漆工技術の無い土地においては、その手入れ法は自分達が自国で調度品に施していることしか術無かった。即ち、ワックスをかけて磨くことであった。新しい漆器が持つ艶を見るにつけ、その艶に近づけるべく、ワックスを重ね、磨き直したことだろう。しかし、そのワックスが経年変化して茶色に変色してしまうとは、予想だにしていなかっただろう。

西洋の美術館で、茶色に変色したり、全体に黄色味があった状態になってしまった作品をよく目にする。輸入量はかなりの数だったとはいえ、高価であり、他に比べれば希少価値であった漆芸品はひとたび破損すれば、すぐに修理の手が加えられていった。漆の技術を持たない塗裝修復家が、家具修復で培った方法を用いたりして。

工芸品修復の国際会議において、しばしば漆の不可逆性が論点になる。即ち硬化後はいかなる溶剤でも溶解することが出来ないという塗料としての長所が、ここでは修理をする時に避けるべき材料としてあげられるのである。漆を用いると修理をした部分が他の部分よりも丈夫になり過ぎるとか、漆器製造工程において塗りが繰り返されることから大幅な塗り替えをされてしまうなどの誤解からである。将来、新素材を使って修理する際に容易に溶解することが出来るようにと考えてパラロイドなどの可逆性のある合成樹脂での処置が主張されるのである。補彩もアクリル系の絵具を用いての色合わせで終了する。

大幅な塗り替えこそが修理の意味だとする考え方は、実は我国の漆工修理に対する考え方にも見られることだ。品質の程度差は有るが、おしなべて工芸は生活調度や什器として日常の使用に供せられる状態を維持されてきたからである。そんな中から、美的、歴史的価値から直接の使用と離れて保存されるものが出てくると、これら文化財の修理はオリジナルの保護に重点がおかれるようになった。さらに美術館の収蔵品となれば「鑑賞」つまり「見られる」ことも意図して修理されねばならない。構造上の安定を図ることもその一つである。しかしオリジナルを侵さずに破損箇所のみ処置をしていかなければならない。古文化財の漆工修理の原則である。西歐の修復家が漆工芸品を可逆性のある材料で修理していることは、漆芸品は漆で修理するという我国の考え方と、一見全く逆の事のように見えるのだが、実はオリジナルを侵さないという方針では、我々と一致していることなのである。

東京国立文化財研究所の在外日本古美術品修復協力事業において、在欧米の漆工芸品が日本で漆芸技法で修復されることに至り、漆芸の修理に携わる一人として、日本の古文化財修理のあり方を海外に示せる好機として受けとめていた。さらに今回、私自身がケルン東洋美術館の「桜蒔絵器局」を担当することとなり、海外で日本の漆芸品がどのように維持されてきたのかを詳しく見られる機会となった。

1, 修理前の調査

- (1) 名称 桜蒔絵器局 17～18世紀
- (2) 所蔵 ケルン東洋美術館（ドイツ）

(3) 法量 縦28.3cm 横55.4cm 高41.9cm

(4) 形状

木造の黒漆塗りに蒔絵が施された、正面にケンドン式の蓋を持つ長方形の器局である。扉の下方左右に付けられた波頭形の太柄（突起）金具が本体底部の太柄穴に差し込まれ、扉上中央の法螺貝形の鍵金具で本体に留められる構造である。天板には波頭をかたどった座金に通した提金具を持つ。

蒔絵は金銀の平蒔絵に研出梨地が併用され、扉の左下方に描かれた土坡に根づいた桜樹が天板と、向かって左側面へと枝を広げ、枝先は背面に回り込んでいる。

正面からの土坡は向かって左側面へと続き、背面では流れの岸辺となる。その流れは、向かって右側面と背面との接合角部上に頂きを持つ岩山から落ちる滝が流注ぐ川と合流する。向かって右側面の岩山には、枝振りの良い松が描かれ、遠景には杉や楓の姿もある。近景には笹や若松などが生えている。背面は水辺に2羽の鳥上方には飛び立つ2羽の鳥を描く。

(5) 破損の状況

底裏を除く表全体にワックスがかけられ茶黄に変色している。

《蓋扉》木取りは横位置に剥ぎ合わせた板を左右両側に端食をつけて挟んでいることが木瘦せから解る。その横方向中央の剥ぎ目付近に横長の亀裂が入り、後世修理で充填接着され補彩が加えられている。全体に細かな筋割れと打痕が見られる。

《向かって右側面》背面との接合面となる角上は木地の狂いにより亀裂がおこり、後世修理がかなり入っている。蒔絵を擬したと思われる補彩が目だっている。脚部となる刳形付近にも縦方向の割れが見られる。

《背面》中央垂直方向に裏面に達する長い割れが入っている。合成接着剤を用いて内側から充填し応急修理をしていることが確認出来る。天板との接合部は横方向に亀裂が入り、右上の雲の描かれている付近に塗膜の浮きがある。

《向かって左側面》背面との接合面の下方に木地の狂いで縦割れが入り、起き上がっている。天板との接合部に横筋の割れが入っている。右下方の正面との角に梨地を擬した補彩があり正面へ続く。塗り肌にはワックスを透かして無数の泡状のものが見える。

《天板》全体に摩滅が激しく、蒔絵の付け描き（花芯や葉脈などの細部を描き込んだ部分）もあまり残っていない。表面の透漆を蒔絵をよけて削りとり、中塗りの黒漆が出された部分もある。

《底部》底裏全体に擦り傷や塗膜の剥離が見られ、側板の下方を刳って作った脚部となる部分の角も傷みが激しい。

《内部》各板の接合部が木地の痩せで剥離して隙間ができています。底板と側板の接する角に釘の突出がある。左右側板に付けられた棚受けの棧木は外れかかり浮いている。取り外し式になっていた棚板は失くなっている。

(6) 修理の方針

この器局は 接合部の剥離からくる構造上の弛みについて再接合が行われているので、持ち運びにおいては脆弱な状況にはなかった。にも拘らず取り扱いで不安定な印象を与えていたのは扉につけられている金具に拠るものであった。まず、鍵金具の可動式の差し上げ留め具が動かず、窪んだままで、扉を閉める時は下方のダボを本体の穴に差し込み、上部の環と本体の環を貫いて差す門で留めなければならなかった。付属している門は他の部分と材質も

異なり、短く細い代用のものである。まず、この差し上げ式の留め具を修理することが、本体の保全を図る上で必要と考えられた。又、金具の周囲には茶色い素材がかなり厚く付着し、付近には塗膜の浮きも見られた。釘の一部に弛みがあり、金具が本体から浮き上がるおそれもあった。以上のことから、今回の修理は、金具を外せる範囲で外して行う事とし、同時に鍵金具の改善を図る事とした。

野地下地（漆分のない下地）や洋塗料で整形された後補は取り除き、漆を使って復元することにした。

蒔絵中の所々に補筆が見受けられるが、総じて金色が赤い。中でも向かって右側面と背面との稜部、向かって左側の正面開口部へつながる角には、赤い下付けによる梨地を擬した部分が目立っていた。鑑賞上この部分は本体に相応しい修理では無いと判断し、これを取り除き、オリジナルの梨地と調和を図った復元することにした。

2、修理の経過をたどって

修理中は、隠されていた沢山の情報が得られる。以下、工程をたどりつつ確認出来た点についても同時に記録する。

(1) 掃除

輸出された漆器を漆を使用して修理するには、まず漆の乾燥を妨げるワックスなどの除去を考えねばならない。ワックスは、長い間にくり返しかけられていることが多いので、硬化したものは落としにくい。

この器局では、まず、埃と汚れを取る為に湿らせた布で水拭きを行った。天板は、白い布を茶色にしながやニ状の汚れがゆるんできた。しかし、他の部分は水分では表面の埃が払われる程度で、茶色の付着はなかった。次にワックスをアルコールで落としていったが、表層はなかなかゆるまなかった。作業を繰り返す内に硬化した部分がとれ、水分に反応するところも現れた。布に付く茶色のものが粘り気を帯びてきた。塗膜のやつれた部分に染み込んだワックスや、蒔絵粉の間に入った物は、完全に落としきれないと判断し、表面に漆固めができると思われる程度で、ワックス除去作業を終えた。

(2) 金具外し

釘の中には、頭を指で挟んで引くだけで、容易に抜けてしまう物もあったが、ゴム板を当てながら金具を保護して釘を抜いた。一番簡単に外すことができたのは、扉の裏面下側の金具、つまり波頭形の裏金であった。扉の上中央の鍵の表裏の法螺貝形金具を外した時点でオリジナルの金具の形状が明らかになった。入隅の丸長方形の金具の跡があり、釘穴も別に空いていた。調査の段階で、形状が本体に合わず、金具のエッジの処理が製作当時の技法とは思われないので、ヨーロッパで、後年付け替えられたのではないかと推測していたが、これにより確認出来た。特に法螺貝形鍵金具の下は、板を切り抜き、溝を作り現金具を収めており、又、オリジナルの金具の錠のためと思われる切り取りもあった。蒔絵の部分は、入隅丸長方形の金具の姿を黒ヌキにして残して描かれており、法螺貝形は大振りて蒔絵の一部を覆い隠していることが解った。ワックスの茶色の変色は、現金具の縁までではなく、オリジナル金具の姿を黒ヌキにしたところまで及んでいた。このことから、オリジナルの金具が付いていた当時に、既にワックスの手入れがなされていたことが解る。天板の手前中央に鍵を受

ける金具が付けられているが、その下からも、オリジナルの金具の黒ヌキが出て来た。

天板の中央には、波頭をかたどった座金に提げ金具が通されているが、座金の足は天板の裏で折り曲げられて固定されているので、外して付け直すと折れ目に疲労が来て、切れてしまう可能性がある。この付近は塗膜の損傷が軽いので、今回は外さずにおくことにした。

扉表下方左右の波頭金具は、釘を全部抜いたにも拘わらず本体からすぐには外れなかった。アクリル棒を金具の角に当てて軽く打つと衝撃で外れた。この金具はL字になった下端に突起があり、これを扉の下端の穴に差し込んで取り付けのだが、釘が効かなくなった為に金具の裏に接着剤が塗られていた。塗面と接着剤の食いつきが不良だったので、取りはずすことができた。接着剤は分析の結果、エポキシであることが判明した。

抜いた釘は オリジナルであれば元に戻されるべきであるが、本件では、長い釘を切り放したまま転用していたり、本体の板厚が9 mmから10mmのところを釘、を長いままに打ちつけ、突き出た先端が裏金に当たって曲がっている物、金具の穴より細い釘を打っている部分があり、全体に状態が悪かった。金具を本体に安定させる為、全ての釘を新調することにした。

(3) 後世修理の部分的除去

背面の表裏を貫く割れは、内側から接着剤を埋めてふさいであった（分析の結果、エポキシであると判明）が、表側からは灰色の下地状のものが入れられていた。しかしその間は空洞になっており、表側から土状の下地を押すと、陥没し分解して取り除くことが出来た。内側のエポキシは溶解出来ないので、針状の刃物で掻き取って溝を貫通させた。溝の上方には塗膜の浮きがあるが、浮いたままでエポキシに固められた状態となっており平らに戻すことは出来なかった。

背面の溝に埋められていた灰色の下地状の物は、右上の雲の蒔絵に出来た亀裂の上にも被せられていた。溶剤に反応しないので刃物で丁寧にかき落としていき、薄膜となったところで、綿棒に水を付けてこすり取って行くと、蒔絵が現れた。実際の傷よりも大きめに下地で覆っていたのであった。傷口付近は蒔絵が擦れており赤い下付けが露呈していた。修理と判断される部分以外でこれ程赤い下付け漆がこすれ出ている所が見当たらない。雲の絵は背面のみで、他の面と続かないのでオリジナルの蒔絵なのか判断しにくい所であるが、この赤い下付けが論点となるかもしれない。

前扉の端食の間に入った横長の傷に埋められていた黒い塗料には金色のまだらの補筆があった。蒔絵が続くようにみせたのだろうか、傷んで開いた隙間に金の蒔絵が残るはずもなく、却って傷があることを目立たせる印象を与えていた。扉自体に反りがきて右上角が起き上がっていた。裏面の溝には、背面と同様に灰色下地状の充填があったが、針状の刃物で掻き取って除去した。

扉の左上角は、黒い洋塗料の上塗りがあったが、ワックスの除去の作業段階で、アルコールで落とす事が出来た。その下からは、白い復元部分が現れた。分析の結果、炭酸カルシウムが主成分であることが解り、並行して分析したアクリル画に用いるモデリングペーストに近い結果が出た。これもアルコールで容易に除去出来た。

背面の左角とその側面に続く岩山蒔絵のある稜線には後補の手が甚だしかった。上方、木地割れを隠す為に補筆されたと思われる部分の横で、新たに起きた木地割れを灰色の下地状の物で埋めている。中程から下方には、梨地の破損部分に赤い梨地を擬した補筆が続く。赤

い塗料は分析の結果セルロースが認められ、ラッカー系の洋塗料であることが解った。この赤い梨地状の部分の中で穴を灰色の下地状のもので埋めている所があった。つまり、灰色の修理の方が赤い修理よりも後の時期のものという事になる。上方の灰色の修理を取っていくと、赤砥の粉の野地下地が現れ、湿り気を与えながらゆるめ取っていくと、木地に虫穴が空いていた。赤い梨地状の部分は、下が野地の整形復元がされた所は、ブロックとなって外れやすかったが、断面を見て下地が見えないところは下の予測がつかないので、慎重に落とししていった。赤い薄膜の下からオリジナルの梨地が出てくる部分があった。角の稜線上に蒔絵が擦れて無くなったり、打ち傷が目立ったりすると、広い範囲に赤い梨地状の加筆をしてしまったようだ。扉の左下の角付近や、向かって左側面の直角から正面にまわる部分にも同様の赤い加筆があり、特に後者にはオリジナルの蒔絵が良く残っていた。

その他、野地下地によって角が復元されていたところは除去した。

(4) 漆を用いる修理

全体を漆固めした。これは、希釈した漆をひびや亀裂に染み込みませ、あわせて塗膜の内面を強化する目的のもので、表面は溶剤で漆を拭き切り、漆膜を残さない。

次に 構造上不安定な部分から再接着をした。底板の向かって右の太柄穴の横から側板にかけて、割れが入り、手前が沈み込んで動いていた。又、左右内側面につけられた棧も外れかかり浮き上がっていた。麦漆を亀裂に入れ、圧着した。

後世修理を取り除いた部分で、必要なところは刻苧（麦漆に木粉と麻粉を練り込んだ物）で整形、復元した。この際、木地の収縮で段差が出来ていて角の形がくずれているところは、繋ぐ部分がなだらかな状態で続く様にした。刻苧の上は蒔地や錆で肌を整えた。

木地の接合部分が開いて出来た溝や、幅の狭い亀裂には麦漆を含浸した。塗膜が浮いているところは 麦漆を希釈して塗膜下に入れ、圧着した。接着後は塗膜に段差があるので、きわ錆（際錆。溝や段差上に漆と砥の粉を混ぜた錆漆をつけ、溶剤で拭き取ると、わずかに段差の間に錆漆が残る。）をして手擦れをなだらかにした。

保存修理の場合、原則として、虫穴、打痕、木地割れについては塗り直ししない。今回も同様にした。塗り直しは、前修理の復元を一度除き、再整形した部分については行った。角部である為鑑賞上の理由のみならず、強度を与えるため必要と考えた。オリジナルの塗りは、表側は黒漆の中塗の上に透漆がかけられているので、同仕様にした。透漆は経年により赤く見えることがあり、しばしば赤い顔料を用いた修理を見かけるが、修理部分の透けが進むと透漆に入れられた赤が鮮やかになり、後補が赤く目立っていることがある。修理直後より先を見越した修理がなされるべきだろう。

梨地を擬した赤い部分を取り除いてオリジナルが残っていなかったところは、梨地の前の工程である黒中塗りで修理を終えるとすると、修理前の補彩のあった印象と変わってしまう。そこで梨地を一部復元することにした。金沢と東京から梨地粉を5段階の粗さに取り寄せ、サンプルを作り、実体顕微鏡を使って本体の梨地粉と比較した結果、金沢粉の2・3・4号を配合した粉が適当となったので、これを用いた。復元部分がオリジナル部分と区別がつかなくならぬように、わずかに低くして蒔絵をした。

(5) 金具の修理と取り付け

漆工修理と並行して、鍵金具の差し上げ式の留め具を修理して、小さな具の上げ下げで可動するようになった。

鍵は失われて、代用の棒金具が付随しているが、細く短かくて扱いにくい。そこで鍵を新調することにした。頭初の鍵は想像するしか術は無いが、提げる形状では、法螺貝にかかってしまう。門に近く、鍵がかかる形ということで、中管の突起が回転して外管の切り込みに入り止まるという構造となった。

この器局の底板は一度外れかかって釘で打ち直していることが、両側面の下方の刳形横に残る槌跡のような円形の傷の中心に見える釘の芯から解る。しかし、打ち直しの際に底板を元の高さに戻さないままにしたため、内部の底板には横からの釘が盛り上がり出てしまっている。つまり、開口部の高さは、実際の高さよりも3～5mm増えてしまっているのだ。これによって、波頭形の太柄金具が、しっかり太柄穴に沈まず、3環を通すための門も細くなければならなかった。差し上げ式の留め具が上がっても受け穴に届かないことになるし、逆に下方の太柄が空振りすることもあるかもしれない。扉を本体に安定させる方法は、3つの突起がそれぞれ受け穴に収まることである。検討の結果、波頭形金具に下駄をはかせ、少し下げることが最善となった。である。金具の幅と同じで、厚さ2mmの小板2枚を用意し、木地の中に差し込まれる方の突起に引っ掛かるように穴をあけて黒漆塗りをした。再取り付けの際には当然釘穴がずれてしまうが、現金具自体、後世の新補でありオリジナルの釘穴があいたままにされ、しかも長い釘が貫通して作ってしまった穴も見受けられたので、扉の保全からも、この処置に踏み切ることにした。

今回釘を全て新調することにしたが、現金具の釘穴を調べると、場所によって太さが異なっており、1.1mm、1.2mm、1.5mmの釘が当てはめられた。オリジナルの釘穴や曲がった釘穴は、木地の内部に空隙を残したままにしておく、木地が割れ易くなるので、古い穴は埋め木をし、刻苧をして、きわ錆でふさいだ。現金具の釘穴は既に弛んでいたりと、斜めに穴が進んでいるところもあったので、釘の効きを良くする為、埋め木をした。少し下げる金具の他は、元の釘穴に位置をあわせながら再取り付けをした。

(6) 仕上げ

どうしてワックスがかけられたのかを考えれば、紫外線や他のダメージを受けて荒れた塗面を元の状態にしようとした為にはほかならない。従って、ワックスを取り除いて現れる塗面がかなり損傷が進んでいることは大いに有り得る。この器局についても前扉、向かって左側面、天板がかなりやつれている。小さな泡状になって透漆の肌が荒れている。

保存修理は、オリジナルの塗膜の表面に漆塗りを残さないのを原則とするが、紫外線などでかせて艶の無くなった表面は例外だろう。摺り漆等の保護膜が適切な場合もある。

かせたままにされている表面であれば、摺り重ねることで均質な肌が回復されてくるが、この器局の様に、かせた上にワックスがかけられてしまうと取りきれないワックスが目に見えない膜を作っていることも考えられる。塗膜の吸い込み方にむらが出てくるので、摺り重ねても均質になりにくい。

今回は肌が特に荒れているところは部分的に摺り漆をして保護膜をつけた。

3, 終了にあたって

作業が終盤に近付いてくると、作品に対する視点が変わってくる。前半は傷んだところを見ながら、段取りが頭を占めているのだが、だんだん視野が広がっていく。この器局では、蒔

絵の描き分けや、桜樹の位置構成などを見るようになった。

背面の4羽の鳥は、水辺の鳥の姿は付け描きで細部までびっしりと描き込んでいるが飛び立つ鳥は針描きで表現されている。山の樹木の描き分けと考え合わせると、作者は意図的に、遠景を針描きに、近景を付け描きにしているようである。

桜樹の配置だけを写してみると、実に堂々と器局を覆っている。背面の岩山の中腹に遠景として描かれた杉があるが、その横手には桜の若枝のような物が唐突に生えているが、大きさも形も上からあるいは右からまわり込んでいる桜の枝先とよく似ている。下図を作っている段階で残されてしまったのか、分業であったため気づかずに蒔絵されてしまったのか。

唐突に変わるといえば、流水の蒔絵である。滝を含め流水は大概、銀蒔絵なのだが、向かって左側面は何故か金蒔絵である。

雲の模様が、背面以外の面に連絡してないことは修理前から気にかかっていた。右端は完全に後補とみていいが、さて、他の雲はどうなのか。修理の下地の下から出て来た赤い下付け漆はオリジナルのものなのか、修理の銀蒔絵なのか。調査の段階でこの雲は異質なものとしてしか受け取れなかった。しかし修理を終える頃になって桜樹を中心に作品全体を見るようになると、大樹の下で枝の間から空を見上げたとしたら、雲ははるか遠く枝葉の向こうに見えるに過ぎず、他の面の桜の大樹のそばに描かれる必然性はないとも考えられるようになった。

掘り下げて図様が見られるようになるのは、単に時間をかけて見ているからではない。その作品が、修理をされたことで、破損している物から、鑑賞される物へと復帰してきたからだと思う。今終わったばかりの修理が、修理した場所は明らかにされているのに作品の邪魔をせずにいること。修理箇所よりも本体の持つオリジナルの要素へ関心を向けることが出来れば、作品は順調な回復を遂げたということになろう。修理者の負う所を考えると、身の引き締まる思いである。

On the Restoration of “*Sakura Makie Kikyoku*”

Kiyomi Okukubo

Introduction

“*Sakura makie kikyoku*” is a chest with a design of a cherry blossom tree. It is owned by the East Asian Art Museum in Cologne, Germany, and is believed to have been manufactured sometime between the latter half of the 17th century and the beginning of the 18th century. It is a box-shaped chest with a door that opens upward on its front face. On the inner sides of the chest are regulae for a shelf board and, although the shelf is missing today, it is clear that the chest was used to store tea ceremony goods.

Description

The chest is made of what appears to be Japanese cypress. A very thin urushi foundation is applied over this substrate and the entire surface of the chest is coated with black urushi. The outer face of the chest, except for its bottom, is decorated with cherry blossoms and a Japanese garden in *makie*. A cherry blossom tree growing on an embankment is depicted on the front lid and the top board and onto the right and left sides. On the back side of the chest are found an imitation mountain, a waterfall cascading from the mountain, a flowing river and birds playing on the river, depicted with perspective. Several *makie* techniques are used, including *nashiji*, *kirikane*, *togidashi makie* and *hiramakie*. Since *togidashi makie* was used, the uppermost urushi coating film is not black urushi but *suki-urushi*. On both sides of the door (front and back) are inserted wave-shaped brass fittings and a shell-shaped metal fitting with a keyhole; at the center of the top board is a handle.

Present condition

There were traces of several repairs having been made with urushi and European lacquer. The entire surface of the chest, with the exception of the bottom board, had been covered with wax or shellac, at least in three layers. There were horizontal cracks of the substrate close to the center of the door. The joint portion of the bottom board and the side had been nailed, but not jointed properly due to past repair. There were also traces of past repairs on the edges of the chest where cracks had been filled, and the surface coatings had turned red. The shelf board inside had been lost, and the regulae for the shelf had become detached from the sides because of the distortion of the side boards. Furthermore, since the back board had cracked at the center, it was possible to see light from behind. All the metal fittings were European-made and had been added later.

Restoration policy

Since the chest had become distorted by past repairs and the metal fittings of the door would not fit properly, it was decided to remove them temporarily and to repair them. It was also decided to remove the European coating material that had been applied on the surface as well as the *noji shitaji* and calcium carbonate which had been used in past repairs and to use urushi for repair. Decorative parts that had been added later were also to be removed and replaced with reproductions made with original materials. The metal fittings were to be repaired for re-use.

Process of restoration

The metal fittings were removed by expert metal craftsmen. Each metal fitting had become greatly distorted and the nails that had been used had also become bent inside the boards. So a request was made to have the distorted metal fittings fixed and the nails changed with new ones. Traces of the original metal fittings were found when these metal fittings were removed, and it was discovered that the original *makie* decorations had been hidden around these fittings.

The European coating material that had been applied on the surface was removed with alcohol. But it was very difficult to remove the coating material that had been applied in several layers. Various types of solvents were used for cleaning in addition to alcohol and, as a result, the original urushi coating film was uncovered.

Removal of past restorations

The epoxy resin that had been used to fill the cracks on the door and the back board was removed. After using *mugi-urushi* for adhesion, the cracks were filled with *kokuso* and foundation. Traces of past repairs found on the edges were also removed. Since past repairs had been made over areas larger than the actual area of cracks and missing parts, it was possible to uncover original *makie* portions that had been hidden under these repairs. In addition, missing parts were filled with *kokuso* and foundation, and original material was used to reproduce the *nashiji*. Visual damages were repaired.

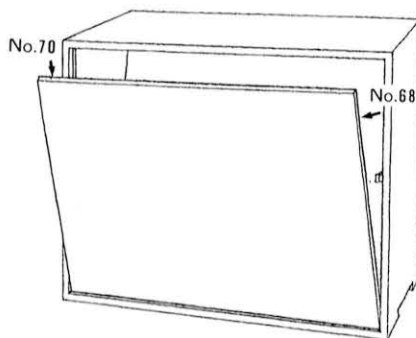
Because the surface of urushi becomes covered with cracks and rough with the passage of time, although these may not be visible, it is necessary to reinforce the original surface. So the entire surface of the chest was reinforced with urushi: after applying urushi diluted with a solvent, the surface was completely wiped so as not to leave any unwanted urushi. Urushi was rubbed in (*suri-urushi*) to places where the coated surface had become extremely rough.

Attachment of metal fittings

Since the chest had become distorted due to past repairs, positions of metal fittings were adjusted by placing hard rubber boards on the inner sides of the inserted metal fittings on the door. The metal fittings were reattached by fixing the distortion and using nails with appropriately adjusted lengths. As the holes made by nails in past repairs were large, they were filled before nailing the fittings.

Concluding remarks

When one spends over a year on restoring an object, one observes the designs and *makie* well. It was possible to learn many ways of expression by looking at the technique of *makie* used on this chest. For instance, different ways of expression are used to depict waterfowl. Two kinds of waterfowl are depicted on the back side of the chest: those that are at the water's edge and those that are about to take flight. A comparison of these birds shows that *kakiwari* is used for the details of the first kind of birds while *harigaki* is used for the second kind. This distinction shows the artist's attempt to differentiate birds which are close at hand from those which are far off. Other examples may also be mentioned: although the waterfall and most of the stream are depicted in silver *makie*, for some reason gold *makie* is used on the left side; the cloud on the upper portion of the back side is not continued unto the side. Through the work of restoring the chest, it was possible to notice details of designs that are normally easily overlooked or to interpret the *makie* designs.



The numbers indicate the photos' numbers.



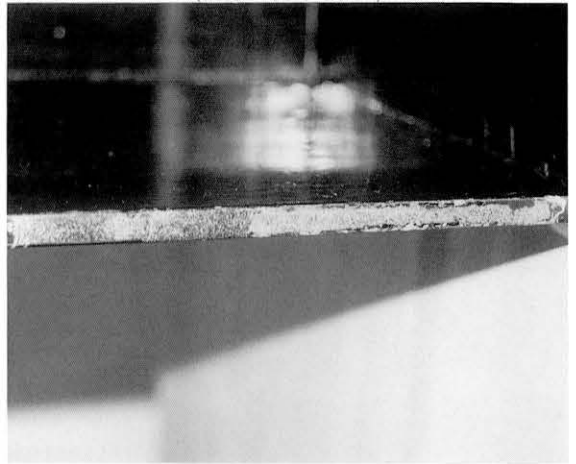
64 桜蒔絵器局 (修理前)
Sakura Makie Kikyoku (before restoration)



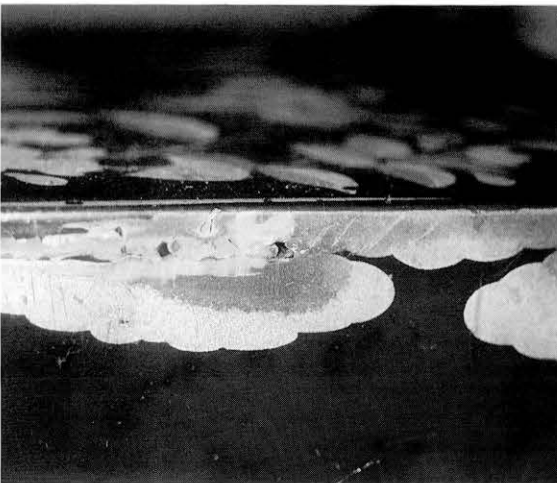
67 同 (修理後)
Foundation applied in the past treatment
(after restoration)



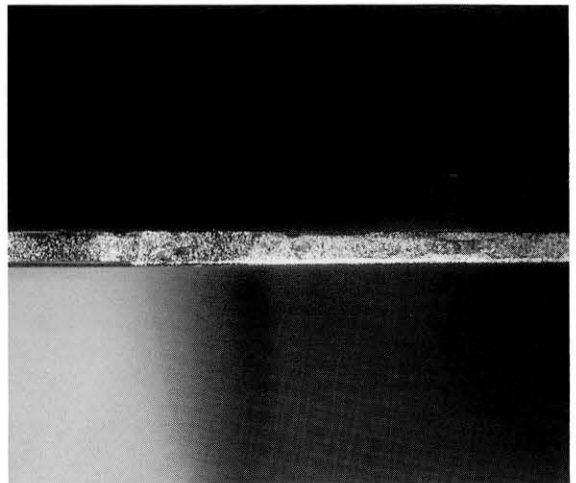
65 同 (修理後)
Sakura Makie Kikyoku (after restoration)



68 後世修理の除去 (修理中)
Removing the old fillings



66 後補下地 (修理前)
Foundation applied in the past treatment
(before restoration)



69 復元部分 (修理後)
Partial reconstruction



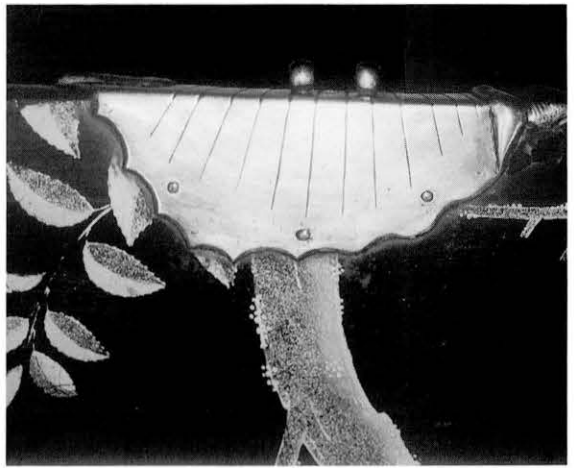
70 後世修理の露出 (修理中)
Old gesso fill (during restoration)



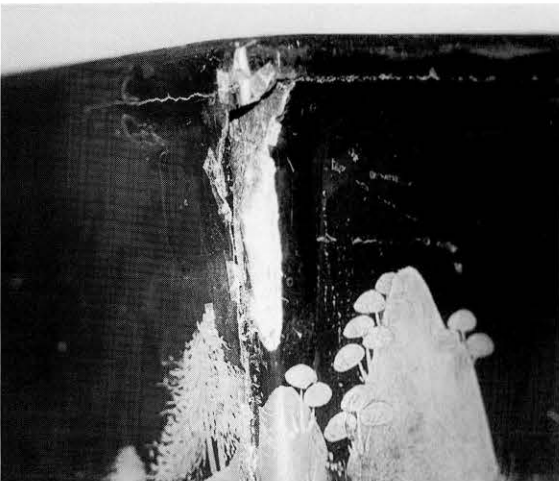
73 同 (修理後)
Proper right back top corner (after restoration)



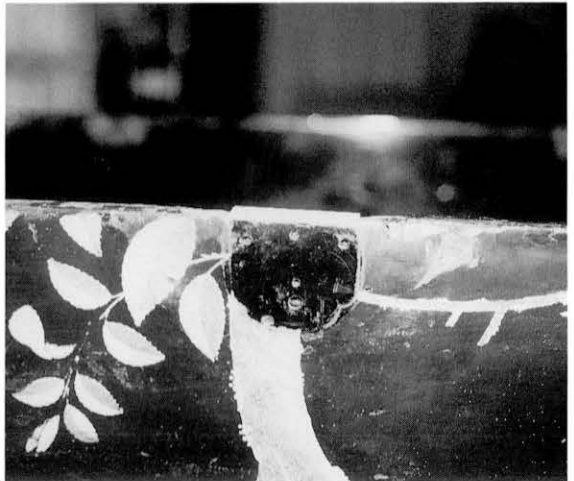
71 同 (修理後)
Old gesso fill (after restoration)



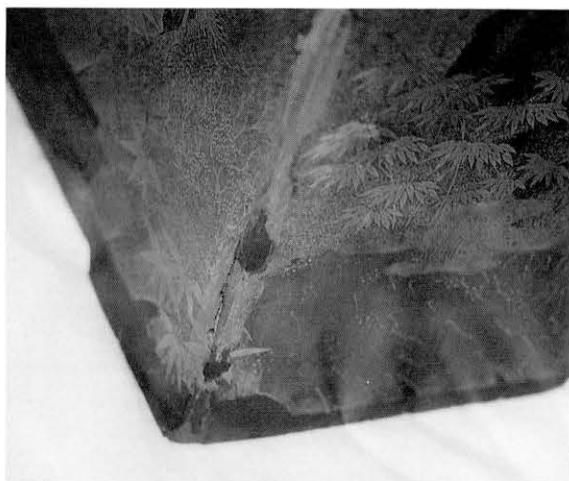
74 天板鍵受け金具の周辺のワックス (修理前)
Wax around the lock plate (before restoration)



72 右側面と背面の間の上角 (修理中)
Proper right back top corner (during restoration)



75 同 (修理中)
Around the lock plate (during restoration)



76 右側面と背面の補彩 (修理前)
Overpainting (before restoration)



77 同 後世修理の露出 (修理中)
Noji-shitaji applied in a past treatment on the edge of the right side and the back (during restoration)



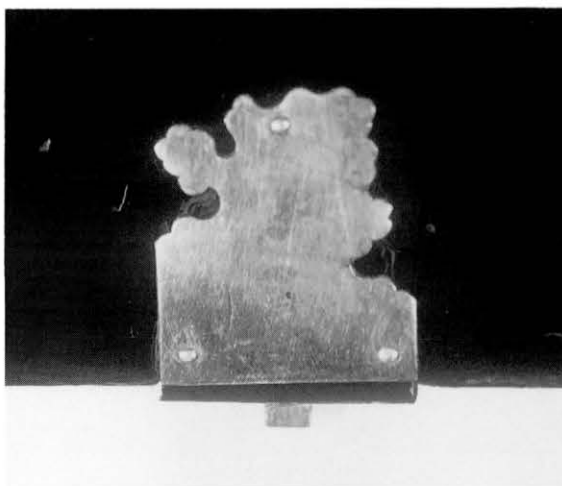
78 同 後世修理の除去 (修理中)
Removal of past treatment (during restoration)



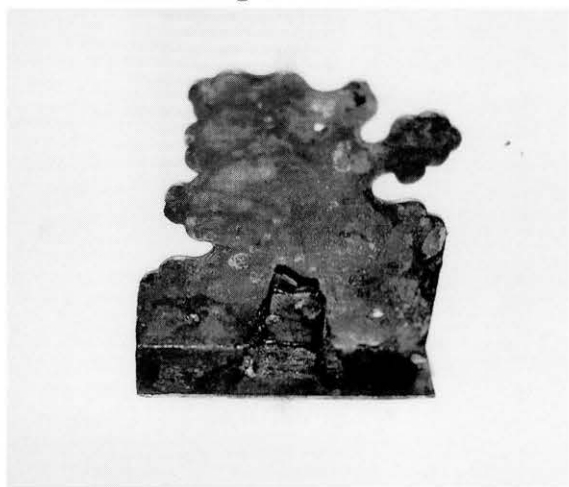
79 同 梨地の復元 (修理後)
Retouching of *nashiji* (after restoration)



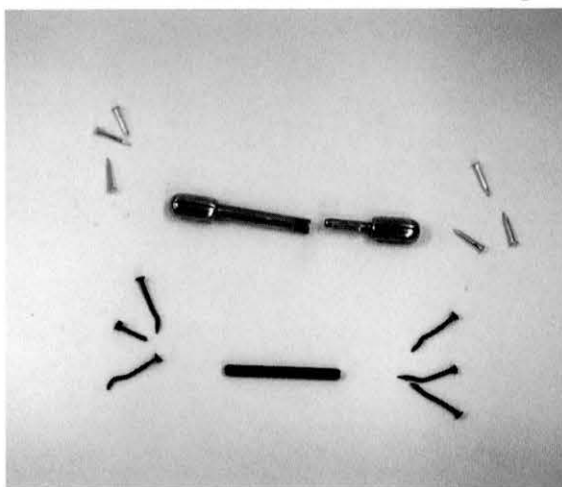
80 波形の金具正面扉左下 (修理前)
Metal fitting (before restoration)



83 同 裏金の調整 (修理中)
Treatment of the back of the metal fitting



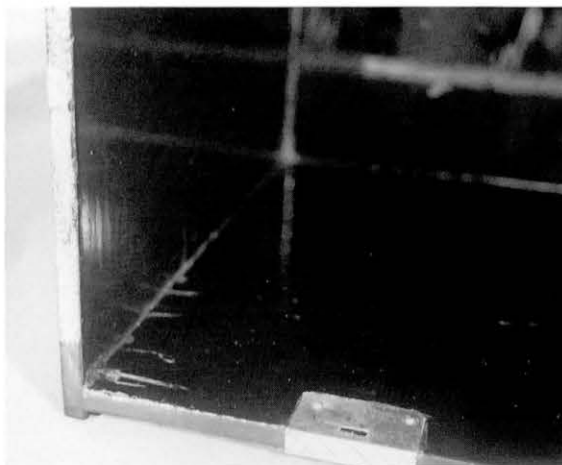
81 同 接着剤の付着 (修理前)
Adhesive on the back of the metal fitting
(before restoration)



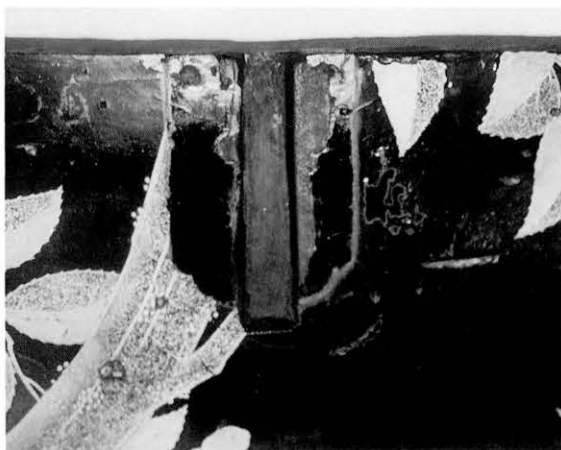
84 釘と鍵 後補と新補
Remade lock pin



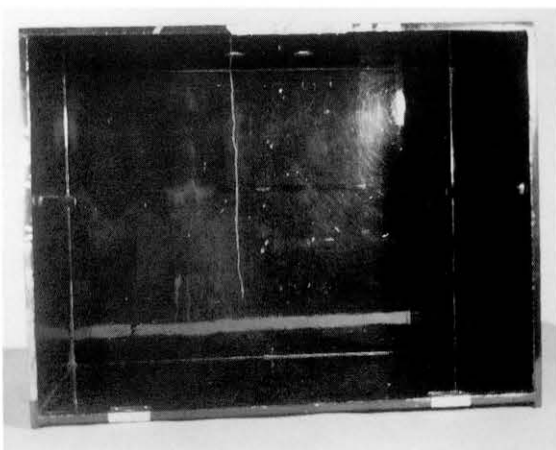
82 金具の下の修理 (修理中)
Cleaning where the metal fitting was



85 金具の取付け
Re-fixing metal fitting



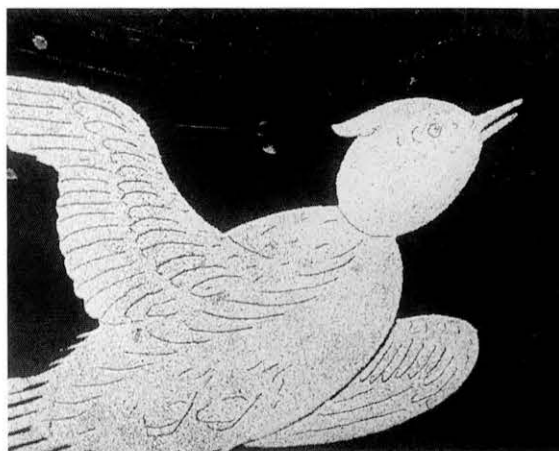
86 金具跡の調整 (修理中)
Cleaning of wax traces (during restoration)



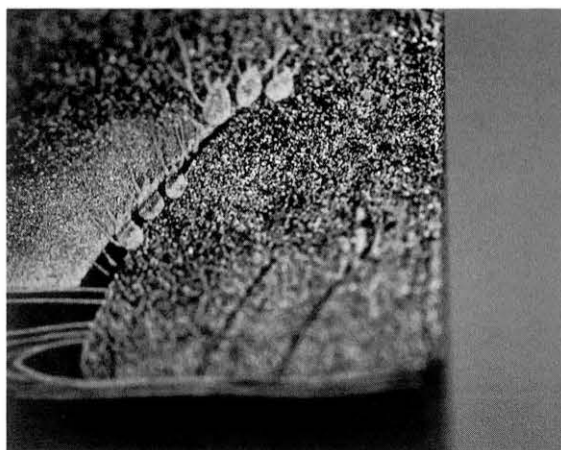
89 器局内部 (修理後)
Inside of the *kikyoku* (after restoration)



87 鍵の新補 (修理後)
Lock (refixed)



90 鳥の針描き部分 (遠景)
Bird in the background with detail lines in *harigaki* technique



88 蒔絵復元部分 (修理後)
Retouching of *makie*



91 鳥の付描き部分 (近景)
Bird in the foreground with detail lines in *tsukegaki* technique